

主 題：偽教師への神のさばき④

聖書箇所：ペテロの手紙第二 2章13b-16a節

どうぞⅡペテロ2：13をお開きください。

これまで私たちは、もし神の敵として生きることを選択したならば、それにふさわしい報いが待っているということを見てきました。パウロはローマ2：6-8で「神は、ひとりひとりに、その人の行ないに従って報いをお与えになります。忍耐をもって善を行ない、栄光と誉れと不滅のものをも求める者には、永遠のいのちを与え、党派心を持ち、真理に従わないで不義に従う者には、怒りと憤りを下されるのです。」と言います。パウロはもしあなたが神に従うという選択をするならば、そこには神の祝福があるけれども、神に背を向けて逆らい続けるならば、そこにはそれにふさわしいさばきがあると教えました。旧約聖書の中でも「あなたから遠く離れている者は滅びます。あなたはあなたに不誠実な者をみな滅ぼされます。しかし私にとっては、神の近くにいることが、しあわせなのです。」（詩篇73：27-28）と、詩篇の著者はそんなふうにして、神から「遠く離れている者」には必ずそれにふさわしい報い、さばきがあると警告しています。ですから旧約の時代であろうと、新約の時代であろうと神は同じメッセージを常に与えておられます。神に逆らい続ける者にはそれにふさわしい報いがあると。しかし、常にそこには神の赦しがあるということも教えるのです。ペテロは人間も動物もみんな滅んでしまう、死を迎えるけれども、人間にはその後神のさばきがあるということも教えました。ひとりひとりその備えをしなければならぬ。自分の人生の清算をする時に神がお与えになるのは永遠の滅びなのか、永遠の祝福なのかです。

ペテロはこうして教会に入り込んできたにせ教師たちの真実の姿を讀者たちに明らかにしようとする手紙を記しました。彼らの罪が暴露されていくわけです。これまで私たちはなぜこういう人々が危険なのか、どうしてこういう人々がさばきに服するのかを見てきました。彼らは肉の奴隷であり、権威を侮るものであり、大胆不敵な者であり、尊大な者あり、高慢な者たちであると。彼らがいかに罪に染まった者たちであるかということも教えてきました。

6. 「偽り者・惑わす者たち」 13b-14a節

きょう私たちは第6番目を見るのですが、13節の後半を見てください。そこには彼らが偽り者であり、そして惑わす者だということが記されています。「彼らは屋のうちから飲み騒ぐことを楽しみと考えています。彼らは、しみや傷のようなもので、あなたがたといっしょに宴席に連なるときに自分たちのだましごとを楽しんでいるのです。」とあります。まずペテロはこの偽りの教師たちの行動を記しています。彼らがどんなことをしていたのか、改めてそのことをペテロは記すのです。そして後半14節には、行動ではなくて彼ら自身の行動を生み出している心がどういうものかを明らかにしていきます。大変罪に染まった教師たち、そのことをこのみことばを通してご一緒に見て行きたいと思えます。

1) 彼らの行動：

まず13節、「彼らは屋のうちから飲み騒ぐことを楽しみと考えています。」、実はこの原語のことばの配列を見ると、「楽しみ」ということばがあって、「考え」ということばが続き、「屋のうちから」とか「屋間に」ということばが続いて、最後に「飲み騒ぐ」となっています。この13、14節は大変訳すのが難しかったと思います。私たちは、この中に記されているペテロ自身が伝えたかったメッセージを見ていくわけですが、そのような配列だということもまず頭の中に置いておいてください。「楽しみ」ということばが最初に出てくるということは、これがペテロが強調したかったことばだということです。

「楽しみ」、彼らはこういったことを行うのが大好きであって、それらが自分たちに喜びをもたらすのだと思っていました。その「楽しみ」としていたものはどういうものなのかを見ていくのですが、その前にこの「楽しみ」と訳されていることばは、新約聖書の中に5回しか出てきません。そして「楽しみ」と訳されているのはここだけなのです。あとの4回は「快樂」や「欲望」ということばで訳されています。彼らは楽しむべきをことを「楽しみ」としていたのではなくて、そうでないこと、つまり罪を大変「楽しみ」としていたということです。

彼らが実際どんなことを「楽しみ」としていたのかを見ていきましょう。先ほどお読みしたように、彼らは「屋のうちから飲み騒ぐことを楽しみと考えています」とあります。「飲み騒ぐ」ということばも非常に珍しいことばで新約聖書の中で2回しか出てきません。こことルカ7：25だけです。このことばのギリシャ語辞典の解説を見ると、「奢侈（度を超えて贅沢なこと）や快樂にふける、逸樂（気ままに遊び、楽しむこと）」と説明しています。また「快樂のとりこ」という意味もあります。それが彼らにとって

の「楽しみ」だったと言うのです。ここでペテロが言っていることは、この人々は自分の快樂や自分の欲望を満たすことが自分たちにとっての一番の関心事であったということです。しかもこのように継続して生きることを彼らは「楽しみ」としていた。しかもそういうふう生きることによって自分自身に最高の喜びをもたらすと思っていました。

しかもこの「楽しみ」は、夜だけではなくて「昼のうちから飲み騒ぐこと」によって得ていたとペテロは教えています。「考えてい」たというのは継続してそのように思い続けていたと。ですから、このにせ教師たちの本性がここでまた少し明らかになったと思います。この人々は自分の快樂や欲望を満たすことしか考えていない。そしてそのためであれば夜だけではなく一日じゅう、昼間でも快樂を満たすことを願って、そのような歩みを継続していたと。これが自分に本当の喜びをもたらすと。ことばは違いますが、かつての私たちも確かにそうであり、今の世の中、こういう人たちにあふれています。何とか自分の欲望さえ満たすことができたら自分は幸せになる、自分の快樂を満たすことさえできれば自分は本当の楽しみを手に入れることができると。人間はどの時代であっても、どの国であっても本質的には皆同じです。まさにこのにせ教師たちはそのように歩んでいたと。こういうふう生きる人々、こういう歩みをしている者たちというのは救われていない人たちです。

ローマ13：13を見てください。「遊興、酩酊、淫乱、好色、争い、ねたみの生活ではなく、昼間らしい、正しい生き方をしようではありませんか。」とパウロがクリスチャンたちに勧めています。パウロは快樂を愛して、それを満たすことを追求する、かつての、救われる前の生き方ではなくて、救われた者にふさわしい「昼間らしい」正しい生き方を行いましょと勧めているのです。なぜならば、ここに記されている生き方は、救われた私たちにとってふさわしい生き方ではないからです。私たちは昼間の者で、ゆえに私たちは正しい生き方をする者として、闇のわざを脱ぎ捨てて昼間のわざをなす、そんな者へと変えられたのだからと。この中に六つの名詞が出てきますが、詳しい説明はしません。簡単に復習すると、

(1) 「遊興の生活」

これは酒宴、お酒に関する話です。飲み騒いでいる様子です。

(2) 「酩酊の生活」

これは、泥酔するとか、強い酒の乱用です。ここに描かれているのは強い酒を飲んで酔っ払っている人の姿です。そういうもののとりこになっているという話です。

(3) 「淫乱の生活」

次の二つは「淫乱、好色」ということばです。「淫乱」というのは自分の快樂のままに欲望を満たすことです。例えばみことばが禁止している同性や夫婦間以外のセックス、「淫乱」ということばはそういう意味を持っています。

(4) 「好色の生活」

「好色」というのは、放逸な欲望であったり、放縦な生活。男女間にあってだらしない振る舞いの話です。もっと言えば、「好色」というのは不道徳を表すだけではなくて、恥じることを忘れた人、何をしても恥を感じない、何をしても構わないではないか、まさにそういう人です。だれに見つかろうと構わない。そういう歩みをしている者たちです。ですから、この三つ目、四つ目に出てくる名詞というのは性的な罪、性的な不道徳を記しているのです。これらがすべて複数形で描かれているのは、いろいろな形の罪がこれに関連しているからです。

(5) 「争いの生活」

5番目、6番目のことばには「争い」、「ねたみ」とあります。「争い」の生活というのは不和や口論、つまり地位や権力、名声に対する欲望、また優れた者に対する憎しみです。救われた者が持っているのではないことばです。なぜなら救われた人というのは、神の愛があるわけですから。すべての中心が自分だというのは救われる前の話です。しかし、私たちはそこから解放されたのです。でもこの人たちは争いの生活、自分よりも優れている者たちに対して憎しみを持っている。

(6) 「ねたみの生活」

そして最後に「ねたみ」が出てきます。もちろんこれは悪い意味であって、自分が持っているものに満足できないのです。そして人に与えられたあらゆる祝福を否認し、嫉妬深い目をもって他の人たちを見ている様子です。なぜ自分がこんなことを経験しているのか、なぜあの人たちだけが幸せなのか、そういった人たちです。この二つは単数です。それぞれの心の態度を明らかにしている。

このパウロの教えを見ても明らかです。こういう罪というものを行っている者たちに対して、この生き方は救われていない者たちの特徴であって、救われたあなたたちはこういう生き方から解放されたのだと、だから正しい生き方をしようパウロは勧めたのです。まさにここに記されていたことは救われていない者たちの特徴であり、きょうのテキストのⅡペテロ2章に記されている人々の生き方というのは、まさに救われていない者たちの生き方です。彼らは酒やセックスといった放蕩の生活を楽しんでい

たし、しかもそれを昼間から堂々と隠すことなく行い続けていた。だからペテロはこの人たちのことを13節の中にあるように「しみや傷のようなもので」ということばで表しています。この「しみ」というのは道徳上の「傷」とか「汚点」という意味です。「傷」というのは「欠点」とも訳されることばです。ペテロはこういうたとえを用いてこの人々が神の前にふさわしくない罪に汚れた存在だということを明らかにしました。

・これは主イエスとは全く異なる I ペテロ1：19

彼らとイエス様や我々クリスチャンを比較した時、どんな違いがあるかということ、イエス様に関してはIペテロ1：19に「傷もなく汚れもない小羊のようなキリストの、尊い血に」よってと出てきます。「傷もなく汚れもない小羊のようなキリスト」、イエス様が「傷」も「汚れ」もなかったと。イエス様のうちには全く罪がなかった。汚れている部分がなかったと。

・主によって贖われた者の姿とも異なる エペソ5：27、IIペテロ3：14

それはイエス様だけではない。私たち救いにあずかった者たちもそのような人へと神は変えてくださったのです。パウロはエペソ5：27に「ご自身で、しみや、しわや、そのようなものの何一つない、聖く傷のないものとなった栄光の教会を、ご自分の前に立たせるためです。」と出てきます。年齢とともにできる「しわ」の話をしていないことはおわかりだと思います。「教会」も建物ではなくクリスチャンたちのことです。救いにあずかった私たちはかつての罪から聖められたのです。だから聖い神の前に立つことができるのです。このようにパウロも救いにあずかった者たち、そして先ほど見たようにペテロもイエス様がどのような存在であったのかを教えてくださいました。それを見た時に、ここに書かれている人物とは全く違います。ペテロが言うように、彼らは「しみや傷のようなもの」だと。汚れに汚れてしまっていると。イエス様とも私たちとも違うと。それを見てもこの者たちが救いにあずかっていたいなかったということが言えます。

彼らはこういう生き方をしていたのですが、それだけではなかったのです。続けて13節を見てください。その後「あなたがたといっしょに宴席に連なるときに自分たちのだましごとを楽しんでいるのです。」とあります。彼らはそこにこそ本当の楽しみがある、そこにこそ本当の幸せがあると信じてこういう快楽を追い求めていたわけです。それだけではなく、「あなたがたといっしょに宴席に連なるときに自分たちのだましごとを楽しんでいる」と。この「宴席」というのは一緒になって食事をするところ、ごちそうを食べるところ、宴会をするところです。特にコリント教会などは聖餐式の後、彼らは食事会をしました。そのような機会をこのにせ教師たちは大変好んでいたことが「自分たちのだましごとを楽しんでいる」と書かれています。

ペテロが何を言わんとしたのか説明します。このにせ教師たちは、自分たちの快楽の生き方を公に楽しんでいただけではありません。教会の中でなされている愛餐に、だますことを目的に連なり、そして教えを受ける者たちに悪影響を及ぼしていたのです。自分たちが罪の生活をしているだけではない。彼らは教会で集まる人たちのうちに働いて彼らをだまし、自分たちの生き方に彼らがならうようにという思いをもって教会の中での働きをしていたと、このみことばが教えます。彼らはだますことを目的としていたのです。彼らが愛餐に集うのはそこにいる人たちを惑わすためなのです。パウロはそういう人たちのことをこう言っています。「そういう人たちは、私たちの主キリストに仕えないで、自分の欲に仕えているのです。彼らは、なめらかなことば、へつらいのことばをもって純朴な人たちの心をだましているのです。」、ローマ16：18です。まさにそれがこの教会の中でも起こっていたわけです。

不思議だと思いませんか？この人たちの生き方を見たら、こんな人の教えを受けるべきではないと、普通思います。彼らは快楽のとりこになって、そういうものを追い求めているのです。そこに喜びがあると彼らは信じていました。そういう生き方をしている教師から一体何を学びます？その生き方が明らかにしているのは、彼らは神に仕える者たちではない、偽りの教師だと、普通ならそれに気づいてこういう人たちの教えを受けてはならないと、そういう人たちを教会から追い出すはずなのに、実はそういうことが行われていなかったということです。なぜかということ、このにせ教師たちは、神の前にあたかも正しい者であるかのように振る舞いながら、教会の中で悪影響を及ぼし続けていたのです。

パウロはコリント教会に宛てたIIコリント11：13の中で「こういう者たちは、にせ使徒であり、人を欺く働き人であって、キリストの使徒に変装しているのです。」と書いています。ですからコリントの教会も、そしてこの小アジアの教会もそうでした。そういう偽りの教師たちがあたかも自分たちは正しい教師である、神のことばを、真実を語る者たちだと装って入り込んで来て、自分たちが罪の生活をするだけではない、そういう生き方を人々が受け入れるように悪影響を与えようとたくらんでいたのです。こういうことが教会の中で行われていたのです。そのことをもう一度ペテロが明らかにするのです。

2) 彼らの心：

(1) 「性欲に満ちている」

14節には行動から彼らの心へとペテロが教えを進めていきます。14節「その目は淫行に満ちており、罪に関しては飽くことを知らず、」、「その目は淫行に満ちており」の「淫行」と訳されていることばは新約聖書の中に7回出てきます。そのうち5回は「姦淫」と訳されていて、1回だけ「貞操」と訳されています。「その目は淫行に満ちて」いる、その人が見ているのがみんなこの「淫行」に満ちたものだと言っています。それはこの人々が女性を見る時には自分の性欲を満たしてくれる対象としてしか見ていないということです。そういう教会の教師たちがいるような場所はどんなところでしょう？でもこのみことばが教えてくれるのは、その偽りの教師たちはいかにしてその人たちをだまして、自分たちの性的欲望を満たすか、そのことしか考えていないと言うのです。しかもここにあるように、「罪に関しては飽くことを知らず」と、もちろん性的願望もですが、ほかの罪においても飽きることがない。大変貪欲な者たちでもっと欲しい、もっとそれを行っていきたくて。ここまで見ても、なぜこんな人たちに教会の人間がだまされてしまうのかと思いませんか？生き方を見てもそうだし、教えている内容を見てもそうです。彼らはいろいろな時にそういう機会を探っているのです。普通だったらこれは大変危険な状態だと、少なくとも教会の中でそういうことに気づく者たちがいて、正しい行動に至ると我々は思うのですが、残念ながら、こういった人々に誘惑される者たちが群れの中にいたということです。

また、「心の定まらない者たちを誘惑し、」と書いてあります。これはその人がぐらぐらしている、ぐらついているということです。しかも「誘惑」というのは「えさで誘う」とか「えさで捕らえる」ということです。ヤコブもそのことを教えていますけれども、釣りの話を思い出してください。えさがぶら下がった釣り針、魚はそこにあるえさしか見ないから、だまされてそこに行く。まさに疑似餌にだまされて釣られる魚のようなものです。なぜなら魚を釣る人たちはそうやって魚を捕まえることが目的です。そのために彼らにとって魅力的なものを前に垂らして、そこに食いついてくることを願っているのです。まさにこの偽りの教師たちがやったことと同じです。彼らはその教会の人々を騙すために、ありとあらゆることを試みているわけです。実際にパウロはⅡテモテ3：6で「こういう人々の中には、家々には入り込み、愚かな女たちをたぶらかしている者がいます。その女たちは、さまざまの情欲に引き回されて罪に罪を重ね、」とあります。ですから実際にそういうことがあったということです。実際にそういうことがあるということです。大変悲しい現状をペテロは明らかにします。これは2000年前だけの話ではなくて、今も気をつけなければならないことです。

ここにあるように「心の定まらない者たち」は誘惑されていくのです。心がぐらぐらしている者たちは誘惑されるのです。つまり信仰の土台がしっかりしていないのです。信仰の根がしっかりと張っていないのです。ここに記されているようなこういう人たちは聖書を学ばない人です。聖書を学ばない人がどうやって信仰において成長します？不可能です。なぜなら救われる前の自分はというと、自分の考えや自分の経験に基づいて判断をしてきました。でも救われるというのは、そういうところから解放されて、信仰の成長とともに私たちは自分たちが何を思うではなく、神が何と言われているかに基づいて判断する人に変わっていくわけです。信仰的な人、霊的な人というのは自分たちがどう思うかではない。聖書が何と言っているのか、神が何と言われているのか、そこに基づいて判断する者たちです。だからいろいろな教えを受けたとしても、それが本当に聖書的なのかどうか判断できるのです。でもそれができない人たちというのはまだまだ霊的に成長していないのです。その成長していない人たちを見た時に、多くの人がみことばを学んでいない。だから成長しないのです。

また同時に、聖書を一生懸命学んでいるかもしれない。学んでいてもすぐにその教えを忘れてしまうのであれば、成長を見ることはできません。皆さんがどんなにたくさんのノートを取ったとしても、それが皆さんの生活に生きていなければ全く意味がないわけです。私たちは学ぶことに満足しているかもしれない。でも神が要求していることは学んだことを実践することです。学んだことをどれだけ自分が心に受け入れたかということは、その教えに従って生きているかどうかによって明らかになります。ですから聖書を学んでいてもその教えをすぐに忘れる人、聖書の教えを実践していない人は、どんなに学んでいても、どんなにたくさんの情報を持っていたとしても、信仰は成長していません。だからいろいろなことに惑わされてしまう。まさにここにあるように心の定まらない、ふらふらした状態の信仰者だと。私たちが目指すのは、常に聖書に基づいた判断ができる人たちです。神が何と言われているのか、そのことに基づいて判断ができる者たち、そういう人たちを目指すのです。

また、このふらふらする「心の定まらない者たち」のもう一つの問題は何かと言うと、すぐに人を見てしまうことです。その人が自分の好みの人だったら、教えられている内容よりも教えている人にひかれて、その教えをそのまま受け入れてしまう。そういうケースを聞いたことがありますか？この人が教えているのだから間違いないと。こんな素敵な人だから教えている内容は正しいに違いない。まさにこういった人々というのはここにあるように「心の定まらない者たち」です。私たちが見なければいけないのは神のおことばなのです。ここに立つのです。日々いろいろなことを経験します。いろいろなものを

読みます。いろいろなものを耳にします。いろいろな教えを周りのクリスチャンから聞くかもしれない。その時に私たちがすべきことは、本当にそれが聖書が教えていることかどうかです。もし確信がなければ、周りのクリスチャンたちと話すことです。あなた、これをどう思う？この教えはどうなんだろう？こういうことを聞いたけれども、これは本当に聖書が言っていることなのか？と。そうやっていつもみことばでもって吟味するなら、間違いなくあなたの信仰は変わってきます。ここで言われている人たちはそういうことをしない者たちです。それで彼らはこんな考えられないようにせ教師たちにだまされてしまう。ペテロはそのことを警告するのです。

(2) 「物欲に満ちている」

さて、にせ教師たちの心の様子、最初に出てきたのは彼らは性欲に満ち溢れている存在だということでした。二つ目は彼らは物欲に満ちていると。14節の後半を見ると「その心は欲に目がありません。」とあります。この「欲」というのは「貪欲さ」、「欲深さ」というものですが、「目がありません」と日本語に訳されています。これは大変難しい訳だったと思います。このことばは「～の点で鍛錬される」とか「習熟する」とか「訓練される」という意味です。このことばに関してパークレーという神学者はこういう説明をしています。「この『目がありません』と訳されたことばは、スポーツマンが試合のために自分を訓練し、鍛える時に用いられることばである。この人たちは実際にはただ禁じられた欲望に対してのみ集中するために、自分の知性を鍛えたのである。彼らは良心を滅ぼすまで意図的に良心と戦い、また鋭敏な感覚を抑圧するまで意図的に感覚と格闘したのである。彼らは禁じられたことに集中するために意図的に自分を鍛えたのである。彼らの人生は徳を滅ぼし、偽の技法に長けた者となるための大変な努力の継続であった。」と。そういう意味を持ったことばがここで使われていると。つまりこの人たちは自分のやりたいことをやっていきたいのです。主イエス・キリストの救いを受け入れていなくても、私たちは罪を犯せば少なくとも良心の呵責を感じます。この人たちはそういうものを一切感じないように鍛えたと言うのです。この箇所は直訳すれば「彼らは欲によって鍛錬された心を持っている。」、「彼らは貪欲に習熟された心を持っている。」という意味です。幾ら罪を犯しても自分たちの心が責められないように彼らは鍛えたのです。そういう人たちだとこの箇所は我々に教えてくれています。彼らの心はそのような性欲で満たされ、どうやったらそれを満たすことができるかを考えているし、同じように物欲に満たされ、どうやったらもっと物を得ることができるかを考えている。彼らは何かを与えるというのではなく、人から何を得ることができるかを考えながら生きていた。そういう人々だとペテロは言うわけです。

ですから14節の終わりに「彼らはのろいの子です。」と書いてあります。まさに「のろい」を受けるにふさわしい者たちだと。イエス様がマタイ25章で永遠の滅びに至る者たちに対して次のようなことを言っています。41節「のろわれた者ども。わたしから離れて、悪魔とその使いたちのために用意された永遠の火にはいれ。」と。だれが「のろわれた者」たちだったか。この人たちは神の救いを拒み続ける者たちです。主イエス・キリストが備えてくださった完全な救いを拒み続ける者たちです。そういう者たちに対して神が言われるのは「のろわれた者ども。わたしから離れて」、永遠に離れて、あなたたちは「悪魔とその使いたち（悪霊たち）のために用意された永遠の火」、地獄に至るのだと。それがあなたたちにふさわしいことだと。ここでも同じことをペテロは言っているのです。我々が今見て来たように彼らの行動も、彼らの行動を生み出している心も罪に染まり切っている。ペテロが言ったように「しみや傷のようなもの」だ、汚れに汚れ果てた者たち、この人たちは自分たちが神の祝福を拒んでいるだけではない。周りの人々が神の祝福を受けないように妨げているのです。だからのろわれた者たちなのです。こういう人たちだったとペテロが言います。

7. 「強欲な者たち」 14b-16節

最後に14b-16節を見てください。7番目に非常に強欲な者たちであるということがわかります。15節に「彼らは正しい道を捨ててさまよっています。不義の報酬を愛したベオルの子バラムの道に従ったのです。」とあります。このにせ教師たちに対してペテロは「彼らは正しい道を捨ててさまよっている」と言います。この「正しい道」とはもちろん真っ直ぐな道のことです。このⅡペテロ2:2でペテロは「真理の道」ということばを記しています。その「道」と同意語です。正しい救いへと導く「正しい道」のことです。神がご自身のみことばである聖書に記された、救いへと導く「真理の道」のことです。この偽りの教師たちはその「正しい道を捨てて」と書いてあります。この「捨て」ということばはその道を意図的に捨てるということです。そしてその真っ直ぐな道を歩むのではなくて、間違っただ道をさまよいながら歩む選択をしたということです。

◎ バラムの誘惑 民数22:1-6

そしてまさにそれは「不義の報酬を愛したベオルの子バラムの道に従った」と。このバラムという人物は預言者でした。モアブの王であったバラクはイスラエルが余りにも多いのを見て、何とかイスラエルに

勝利するために、バラムを呼んでこの預言者にイスラエルをのろってもらおうとするわけです。それによって自分たちはイスラエルに勝利することができると考えて、バラクはバラムを自分のところに招こうとするわけです。もちろん使いを遣わすわけですが、バラムはやって来ません。彼は主の前にどうしましょうと尋ねます。その時に神がバラムにこんなことを言っています。「あなたは彼らといっしょに行ってはならない。またその民をのろってもいけない。（これはイスラエルの民の話です）その民は祝福されているからだ。」（民数記22：12）、このように神が答えを与えました。このことはすべて民数記22章の中に出てきています。そして、バラクから遣わされた者たちがその報告をします。そしてバラクは前の者より大勢の、しかも位の高い司たちをこのバラムのもとに遣わします。そしてこんなことを言うのです。どうか私のところに来てください、それを拒まないでくださいと。王であるバラクは「私はあなたを手厚くもてなします。」（17節）と言っていますと。おもしろいのは、もうバラムは神様からのメッセージをもらいました。行ってはいけないし、イスラエルはのろってはいけないと。にもかかわらず、このことばを聞いた時にバラムはもう一度神の前に立つのです。そして立つ時に彼は彼を迎えに来た者たちにこんなことを言うのです。「今晚ここにとどまりなさい。主が私に何かほかのことをお告げになるかどうか確かめましょう。」（19節）と。不思議な話です。もう神様の答えは出ていたのです。それでも彼は答えを求めた。なぜかという、王はあなたを手厚く迎えますからどうぞ来てくださいということばを聞いたからです。

ペテロはバラムは「不義の報酬を愛した」と教えます。つまりバラムの心を動かしたのはバラクのところに行くことによって、何を手にすることができるかです。神のことばよりもこの「不義の報酬を」彼は「愛した」のです。まさにこのにせ教師たちも同じだとペテロはここに記しているのです。彼らは神に従うことを教えようとしているわけでしょう？でも自分自身が従っていない。神に従うことよりも「不義の報酬を愛した」のです。どうしたらもっと自分の快樂を満たすことができ、どうすればもっと物質を手にすることができるのか。彼らはそれを愛して、まさにこのバラムと同じであると。

その時に神が何をなされたのかというと、16節「しかし、バラムは自分の罪をとがめられました。」とあります。どのようにして彼の罪が責められたのかというと、「ものを言うことのないろばが、人間の声でものを言い、この預言者の気違いざたをはばんだのです。」とあります。この狂った振る舞いとどめさせたと。不思議な方法で神様はあなたのやっていることは間違っているとバラムの心にメッセージを与えたのです。そして感謝なことにバラムはそのことに気づいて、彼は悔い改めるのです。私たちがしっかり覚えなければいけないのは、預言者でさえもこういった物によって心が動かされてしまう。パウロが「金銭を愛することが、あらゆる悪の根だ」（1テモテ6：10）と言います。注意していないいろいろな誘惑によって私たちは惑わされてしまう。まさにこのバラムもそうであったと。

感謝なことにこの出来事を我々が見る時に、こういうことが言えます。神はこのバラムを憐れんだのです。そして神は彼に過ちを示して、悔い改める機会を与えてくださった。ということは神様は救いの機会をいつも備えてくださっているということです。この16節の中を見た時に、特にこの「とがめられ」という名詞は最初に出てきています。強調したいからです。神は彼の心に働いて、自分は間違っているのだという確信をもたらしました。自分の選択が神の前に正しくないことを示された。そして彼は神の前に立ち返るのです。ひょっとしたら神はクリスチャンであるあなたの心にも働いているかもしれない。あなたのやっていることは間違っていると、あなたの選択は間違っていると。感謝なことに神の前に立ち返る時、神は赦してください。我々の責任は、この神様に従って行くことです。それを神は私たちに要求されている。当たり前なのです。この方は神だし、この方は私たちの主人だからです。私たちの人生は自分のために生きるものではありません。それはかつての人生です。でも新しく生まれ変わって本来の生き方をする者になった。その人生は、主人である主に従うという人生です。私たちが主の前に立った時に問われるのは、あなたが何を達成したのか、あなたが何をしたのかではない。私のことばに従ったのかです。神の要求はそこだけです。私たちが教えられるべきことは、自分のやっていることが本当に神の前に正しいのかどうかです。それを吟味しなければならない。この後に私たちは聖餐式をしますけれども、まさに聖餐式が意味するものはそこです。あなたの信仰を吟味するのです。悲しいことに私たちは罪との戦いに敗北することが多過ぎます。でも感謝なことにそこに神の赦しがある。いつも自分の心を吟味しながら罪から離れ続けていくことです。感謝なことは私たちの主は赦しの神です。

そして、この救いにあずかっておられない皆さん、主に背を向け続けている皆さん、神が何回も繰り返すように必ずあなたの罪に対してさばきが来ます。神は忍耐を持って憐れみを持って待っておられる。救いのチャンスがある時に、この救いを求めて出てくることです。感謝なことは私たちの神は憐れみの神だということです。

どうかこれから私たちは自分の心を吟味してこの聖餐式に着きましょう。

《考えましょう》

1. ペテロはにせ教師たちのことを「しみや傷のようなもの」と表現しましたが、その意味を説明してください。
2. 「だましごとを楽しんでいる」（15節）の意味を説明してください。
3. 14節に記されたにせ教師たちの罪を説明してください。
4. 心を常に聖く保ち続けるためにあなたがしておられることを、教会の友人たちと分かち合ってください。